

九州大学フランス語フランス文学研究会

事務局連絡先：

〒815-0041 福岡市南区野間 1-12-18-1304

Tel. (092) 511-2528 / e-mail : zat02065[at]nifty.com

本会はその名称に「九州大学」を冠しながらも、大学間の垣根をこえた研究上のプラットフォームたらんと活動を続けています。会誌『ステラ』の最新号には次の方々からご寄稿をいただきました。

第42号の執筆者（掲載順・敬称略）

吉 井 亮 雄	九州大学名誉教授
小 坂 美 樹	大阪大学非常勤講師
西 村 友樹雄	東京経済大学非常勤講師
西 村 晶 絵	静岡県立大学国際関係学部講師
大 出 敦	慶應義塾大学法学部教授
学 谷 亮	中京大学教養教育研究院准教授
上 杉 未 央	東洋大学経営学部准教授
中 野 知 律	一橋大学大学院社会学研究科特任教授
津 森 圭 一	新潟大学人文学部教授
池 田 潤	白百合女子大学言語・文学研究センター客員所員
井 口 容 子	広島大学大学院人間社会科学研究科教授
飯 田 伸 二	鹿児島国際大学大学院国際文化研究科教授
槇 野 佳奈子	宇都宮大学国際学部准教授
坂 口 周 輔	愛媛大学法文学部講師
高 橋 愛	法政大学社会学部准教授
野 田 農	早稲田大学創造理工学部准教授
松 尾 剛	立命館大学法学部教授
太 田 晋 介	大阪大学非常勤講師
関 未 玲	立教大学外国語教育研究センター教授
大 鐘 敦 子	関東学院大学法学部教授
大 木 勲	水産大学校水産流通経営学科講師

『ステラ』既刊号総目次

第 42 号 (2023 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとチボーデの対話 (2) —— 1929-1936 年の往復書簡 ——	吉 井 亮 雄	1-43
ジッドと「ヴィ・ウールーズ賞」 —— 『狭き門』の選出辞退をめぐって ——	吉 井 亮 雄	45-76
《資料紹介》ヴァレリーとジャムのジッド宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	77-82
ジッド最初の劇作品『サウル』 —— サウル, メナルク, そしてオスカー・ワイルド ——	小 坂 美 樹	83-94
アンドレ・ジッドの音楽観における反ドイツ的側面	西 村 友樹雄	95-111
ジッドにおける「神」と「キリスト」	西 村 晶 絵	113-125
響き合う〈魂〉 —— ポール・クローデルと平田国学 ——	大 出 敦	127-142
文学, 言語, 伝統 —— 滞日期ポール・クローデルの講演活動 ——	学 谷 亮	143-163
クローデルのドイツ —— 「聖マルティヌス」と『縞子の靴』における聖人 ——	上 杉 未 央	165-183
「誠実さの狂気」 —— 『スワン家の方へ』の書評をめぐって ——	中 野 知 律	185-198
ブルーストとヴェルサイユ庭園	津 森 圭 一	199-221
『サント＝ブーヴに反論する』受容史再考 —— サント＝ブーヴの側から読むブルースト ——	池 田 潤	223-239
フランス語の再帰・非再帰形自動詞再考	井 口 容 子	241-252
〈走り読み〉とは何か	飯 田 伸 二	253-265
ルイ・フィギエが描き出した「半人前学者」 —— 写真をめぐる記述を中心に ——	槇 野 佳奈子	267-278
脱内面化の詩学 (2) —— ボードレールからマラルメへ ——	坂 口 周 輔	279-296
ゾラとドレフュスにおける真実を語る言葉 —— 悪魔島の沈黙と取り戻した声 ——	高 橋 愛	297-317
ゾラ『作品』における未完の風景画 —— 小説と絵画の生成過程 ——	野 田 農	319-330
委任代表と受肉代表 —— ドリュ・ラ・ロシェル『馬上の男』における表象の政治学 ——	松 尾 剛	331-350
ポンジュ詩学の虚軸としてのポーラン —— 「言葉の力」の主題を中心に ——	太 田 晋 介	351-376
ケベック文学と移民作家キム・チュイの初期 3 部作	関 未 玲	377-393

Genèse du style, style de genèse : <i>Novembre</i> de Gustave Flaubert	ATSUKO OGANE	395-411
André Malraux et sa fameuse fausse citation	ISAO OKI	413-430

第 41 号 (2022 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとチボーデの対話 —— 1927 年の往復書簡 ——	吉 井 亮 雄	1-42
ジッドとシモーヌ・マリー —— 書簡集『ある彫刻家への手紙』をめぐる ——	吉 井 亮 雄	43-64
ジッドのリチャール・エイド宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	65-74
メナルク像の継続と変遷 —— アンドレ・ジッドとウージェーヌ・ルアール ——	小 坂 美 樹	75-92
アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義 —— 1920 年代の古典主義・ロマン主義論争 ——	西 村 友樹雄	93-112
ヴァレリー「ナルシスのカンタータ」試訳 —— フランス韻文詩をどう翻訳するか ——	鳥 山 定 嗣	113-140
ヴァレリーあるいは「石の女」 —— 『ネエールへの手紙』をめぐる一考察 ——	松 田 浩 則	141-168
《書評》ヴァレリー著 / 塚本昌則訳『ドガ ダンス デッサン』	安 永 愛	169-172
ブルーストとセザール・フランク —— エリートと大衆 ——	和 田 章 男	173-190
マドレーヌの「風味」 —— 『失われた時を求めて』における想起の語り ——	中 野 知 律	191-222
《図書紹介》吉川一義（編）『ブルーストと芸術』	池 田 潤	223-232
コレージュ改革後のブルヴェ試験 —— 2017 年フランス語読解問題の検討 ——	飯 田 伸 二	233-245
古典主義的抒情詩とロマン主義的抒情詩 —— シャルル・バトゥーとスタール夫人 ——	松 浦 菜美子	247-261
ルイ・フィギエとステレオスコープ	槇 野 佳奈子	263-274
ゾラの『獣人』『ルルド』における鉄道の表象 —— 風景・移動・知覚の観点から ——	野 田 農	275-287
見えないものを見る —— モーパッサンの幻想小説 ——	足 立 和 彦	289-298
脱内面化の詩学 —— ボードレールからマラルメへ ——	坂 口 周 輔	299-315
定期刊行物から世紀末を読み直す（1） —— ポール・アダンと 1880 年代の小新聞グループ ——	合 田 陽 祐	317-338
滞日期ポール・クローデルの詩学における「空白」の概念	学 谷 亮	339-356

——詩の存在論をめぐる——		
もうひとつの『田舎司祭の日記』	野 村 知佐子	357-362
セリーヌの〈見出された〉原稿をめぐる	木 下 樹 親	363-368
Autour de la chanson populaire dans <i>L'ivrogne</i> , drame inachevé de Baudelaire	ISAO OKI	369-386

第 40 号 (2021 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
「サント＝ブーヴに逆らって」の転生 ——ブルースト小説の執筆後半期における美学的思索の配置と変奏——	中 野 知 律	1-29
『失われた時を求めて』におけるオデットのイメージ ——オデットからスワン夫人へ——	松 原 陽 子	31-46
ラスキンの庭園美学とブルーストの植物学的詩学	津 森 圭 一	47-66
思想なき詩についての文学論の生成 ——『失われた時を求めて』におけるブロックとゲルマント夫人の意見——	池 田 潤	67-81
《書評》『ブルーストの音楽』——ブルーストと音楽をめぐる最新研究の動向——	和 田 章 男	83-92
フランス語と英語における譲渡不可能所有構文	井 口 容 子	93-102
祈りのあとさき ——『アンヌ・ド・ブルターニュの大時祷書』をめぐる——	田 邊 めぐみ	103-125
ふたつの『悪魔の陽の下に』——ベルナノスとモーリス・ピアラ——	野 村 知佐子	127-131
《書評》ドリユ・ラ・ロシェル『内面の手帳』	松 尾 剛	133-137
La résonance du cri dans les textes de Bataille	ISAO OKI	139-154
ポンジュ詩学の虚軸としてのポーランとシュルレアリスム ——比喩・イマージュの主題を中心に——	太 田 晋 介	155-176
作家パスカル・キニャールが日本に残したもの ——『ル・アーブルから長崎へ』の余白に——	小 川 美登里	177-182
ポール・クローデルと戦争詩 ——「聖女ジュヌヴィエーヴ」をめぐる——	上 杉 未 央	183-200
ポール・クローデルの日本観と大正天皇崩御 ——「ミカドの葬儀」を中心に——	学 谷 亮	201-215
《研究動向》ジッド書簡研究の現状	小 坂 美 樹	217-224
ジッドのシャルル・デュ・ボス宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	225-234

アンドレ・ジッド＝ポール・アルシャンボー往復書簡 ——『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって——	吉 井 亮 雄	235-244
ジッドのマックス・シャッピー宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	245-250

第 39 号 (2020 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
『見出された時』におけるゴンクールの未発表擬似日記	吉 川 一 義	1-17
『失われた時を求めて』における海の風景 ——印象派画家の眼をもつ主人公の誕生——	加 藤 靖 恵	19-35
『失われた時を求めて』におけるステルマリアのイメージ ——ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ——	松 原 陽 子	37-48
『失われた時を求めて』の部屋の描写における無意志的記憶と挿話的レミニサンス	平 光 文 乃	49-65
不都合な加筆 ——アルベルチーナの墓標をどこに建てるか——	中 野 知 律	67-92
ブルーストと音楽受容 ——人間的な、あまりに人間的な——	和 田 章 男	93-118
《書評》和田章男『ブルースト 受容と創造』	小 黒 昌 文	119-124
《書評》美食の文化史と作家研究の「マリアージュ」 ——中野知律『ブルーストとの饗宴』——	坂 本 浩 也	125-128
フランス語の譲渡不可能所有者与格の代名動詞とロシア語の с я 動詞	井 口 容 子	129-143
フランス語教育の価値転換 ——前期中等教育を中心に——	飯 田 伸 二	145-158
小説における象徴主義の記号理論——記号の循環と開かれた解釈をめぐって——	合 田 陽 祐	159-182
『田舎司祭の日記』の聖性	野 村 知佐子	183-190
習作時代のバタイユと古文書学校	大 木 勲	191-210
《書評》恒川邦夫『サン＝ジョン・ペルスと中国』 ——〈アジアからの手紙〉と『遠征』——	山 田 広 昭	211-215
《書評》『虚実のあわいに』 ——大浦康介退職記念論文集——	松 尾 剛	217-220
ジャン＝リュック・ナンシーの『若きカルプ』 ——ヴァレリー詩のパロディ——	鳥 山 定 嗣	221-237
《書評》森本淳生・鳥山定嗣編『愛のディスクール ——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』	安 永 愛	239-248
ジッドの遺稿『ル・ラミエ』 ——森鳩は歎びとともに飛びたつ——	小 坂 美 樹	249-261

ジッド『重罪裁判所の思い出』の献辞をめぐって	吉 井 亮 雄	263-274
自らを語るジッド —— 2つの未刊自筆稿 ——	吉 井 亮 雄	275-282

第 38 号 (2019 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
ブルーストと『春の祭典』	和 田 章 男	1-21
コンブレーの司祭のおしゃべり —— 教会が位置する空想の地図の変遷 ——	加 藤 靖 恵	23-36
ブルーストとナビ派の画家たち	津 森 圭 一	37-58
『失われた時を求めて』におけるイメージと色彩 —— 登場人物の瞳と背景をめぐって ——	松 原 陽 子	59-72
ブルーストと「パランプセスト」	中 野 知 律	73-92
国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」	和 田 章 男	93-100
《書評》加藤靖恵『ブルーストにおける花の世界の変遷』	小 黒 昌 文	101-104
La lumière de la civilisation et l'obscurité primitive — <i>Le Docteur Claude, Conscience et Justice</i> d'Hector Malot —	Aya UMEZAWA	105-115
受動的再帰構文と属性叙述	井 口 容 子	117-125
百間漫步 —— 逢魔が時の文学 —— (その10)	森 茂太郎	127-169
サイエンスライターとしてのエミール・リトレ —— 『哲学的視点から見た科学』の構成と序文 ——	中 筋 朋	171-178
マネ《アブサントを飲む男》とボードレール	吉 田 典 子	179-206
詩とレアリスム —— ゾラ, コペ, モーパッサン	足 立 和 彦	207-224
マラルメにおける室内装飾と詩のディスクール —— 「古序曲」のタペストリーをめぐって ——	松 浦 菜美子	225-238
跛行と韻律 —— ヴェルレーヌの 13 音節詩句をめぐって ——	倉 方 健 作	239-249
混沌を分かち声 —— ドリュ・ラ・ロシエルと撞着語法 ——	松 尾 剛	251-264
アンドレ・ジッドの小説美学 —— 『若い作家への助言』解題 ——	小 坂 美 樹	265-278
ジッドの『贗金つかい』における「悪魔」	西 村 晶 絵	279-296
ジッドの韻文詩「海辺の墓にて」	吉 井 亮 雄	297-306

ジッドのウィリー・スキュルマンス宛書簡 ——ベルギー人愛書家との交流——	吉 井 亮 雄	307-350
--------------------------------------	---------	---------

第 37 号 (2018 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
La représentation de l'âme de la Vierge dans la Dormition : d'après les notes d'Émile Mâle	Yasué KATO	1-18
《翻訳》「知識・技能・教養からなる共通基盤」	飯 田 伸 二	19-42
百閒漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その9)	森 茂太郎	43-74
ブルターニュ公家の弔いのかたち ——『ピエール2世の時祷書』を中心に——	田 邊 めぐみ	75-90
モンテーニュの「気をそらすこと」とパスカルの「気晴らし」	山 上 浩 嗣	91-111
17 世紀の詩学における「認知」	永 盛 克 也	113-132
『赤と黒』の校訂とレナール夫人像 ——解釈と受容の問題——	高 木 信 宏	133-148
マラルメの名をめぐって	鳥 山 定 嗣	149-166
ヴェルレーヌとモンティセリ	倉 方 健 作	167-174
ラシルドの「脳の劇」における幻覚をめぐって ——幻想小説と科学小説のあいだで——	中 筋 朋	175-192
ブルーストとモネの睡蓮画 ——ヴィヴオンヌ川の睡蓮の場面をめぐって——	和 田 章 男	193-211
『失われた時を求めて』における舞台芸術 ——小劇場の演者——	松 原 陽 子	213-224
《翻訳》ベルナノス『欺瞞』(抄)	野 村 知佐子	225-232
霊的避難所としての政党 ——フランス人民党のドリュ・ラ・ロシェル——	松 尾 剛	233-248
セリーヌのパンフレ復刊計画をめぐって	木 下 樹 親	249-254
ジッドによる未完のユゴー論 ——百年後の「ユゴー、残念ながら！」——	小 坂 美 樹	255-266
ジッドにおける「悪魔」 ——ウィリアム・ブレイク解釈を踏まえて——	西 村 晶 絵	267-280
ジッド「チュニスの解放」をめぐる書誌的考察	吉 井 亮 雄	281-290

第 36 号 (2017 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
<i>L'Amour absolu</i> d'Alfred Jarry, un récit d'images	Aurélié BRIQUET	1-17

百閒漫歩 ――逢魔が時の文学―（その8）	森 茂太郎	19-54
世界表象の光と闇 ――エナルゲイアとエネルゲイアの概念をめぐる―	玉 田 敦 子	55-75
詩人とガラス瓶 ――ヴェルレーヌの「兄」「姉」をめぐる―	倉 方 健 作	77-84
ブルーストとワーグナー受容 ――啓示としての『パルジファル』―	和 田 章 男	85-99
ブルーストとノルマンディー地方の教会 ――リジューとタオン―	加 藤 靖 恵	101-118
ブルーストの初期作品における「風景」 ――ボードレール「芸術家の告白の祈り」との関連で――	津 森 圭 一	119-133
ラ・ベルマの『フェードル』――別離の苦悩とラシーヌの詩句――	松 原 陽 子	135-143
菩提樹の記憶 ――『失われた時を求めて』における「復活」のモチーフ――	中 野 知 律	145-164
ヴァレリーの詩集『旧詩帖』の題名と構成	鳥 山 定 嗣	165-182
ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』――魅惑されたナルシス――	高 木 信 宏	183-206
表象は神への供物たりうるか ――ドリュ・ラ・ロシエルの『ブレーシュ』異文――	松 尾 剛	207-218
《書評》クレマン・カルドン＝カン『文芸からフランス語へ ――民主化時代の学問分野』	飯 田 伸 二	219-226
日記体小説のタイトルについて ――アンドレ・ジッドの場合――	小 坂 美 樹	227-242
『背徳者』における病 ――ジッドのニーチェ解釈とキリスト教思想を踏まえて――	西 村 晶 絵	243-254
ジッドとアンドレ・ボーニエ	吉 井 亮 雄	255-272

第 35 号（2016 年 12 月）	執 筆 者	頁 数
フランス語非再帰形反使役動詞の統語構造と意味	井 口 容 子	1 -10
国民文学から文学遺産へ ――前期中等教育を中心に――	飯 田 伸 二	11-24
作品に見る演劇人モリエール	久保田 麻 里	25-37
スタンダリズム史関連資料 ――ジャン・ド・ミティ未刊書簡――	高 木 信 宏	39-58
モニュメントのアナクロニズム ――ゾラの『愛の一ページ』をめぐる―	中 村 翠	59-69
サン＝ポール＝ルーの芸術論と演劇の関わり ――イデオレアリズム登場の文脈から――	中 筋 朋	71-83

ブルーストとショパン	和 田 章 男	85-99
アミアンの黄金の聖母とサンザシの生け垣 ——『失われた時を求めて』ジルベルト登場場面の生成——	加 藤 靖 恵	101-118
ブルーストの庭園美学 ——「閉ざされた庭」と「開かれた庭」のあいだで——	津 森 圭 一	119-135
アルベルチヌと海辺の少女たち ——花咲く乙女たちのイメージ——	松 原 陽 子	137-147
L'ameublement et la création artistique dans « Sur la lecture » de Proust	Ayano HIRAMITSU	149-167
Le scandale Marie, ou un autre prélude à « J'accuse... ! »	Yuji MURAKAMI	169-195
Où est ma maison ? — <i>Das Unheimliche</i> de Pascal Quignard	Midori OGAWA	197-207
Valéry entre prose et vers : De « Paradoxe sur l'architecte » à « Orphée »	Teiji TORIYAMA	209-229
古典主義の理論家レーモン・クノー ——『ヴォロンテ』誌の論考をめぐる——	久 保 昭 博	231-250
アブラハムの物語から『田舎司祭の日記』を読む	野 村 知佐子	251-260
イデア論の行方 ——ドリュ・ラ・ロシエルの『奇妙な旅』——	松 尾 剛	261-278
デュヴェールを読むために	木 下 樹 親	279-286
ジッドとクロソフスキー ——「生きた貨幣」をめぐる——	森 井 良	287-300
ジッドにおける「病」の価値転換 ——1890年代のクリスティアニズム観の変化——	西 村 晶 絵	301-313
ジッド作品における登場人物たちの日記 ——「物」としての日記について——	小 坂 美 樹	315-326
ジッドとアンドレ・カラス	吉 井 亮 雄	327-364

第 34 号 (2015 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
Mémorial, plâtre et biscuits	Xavier BAZOT	1-28
フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性	井 口 容 子	29-37
「抜粋選」とは何か ——その歴史的役割をめぐる——	飯 田 伸 二	39-55
百閒漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その7)	森 茂太郎	57-82
アルスナル図書館所蔵のデュ・バルタス『聖週間』(1581) について	岩 根 久	83-87

ドン・ジュアンの復活 ——モリエール『石像の宴』から『人間嫌い』へ——	久保田 麻 里	89-103
J-J・アンペールのレカミエ夫人宛書簡 ——スタンダール関連資料の再検証——	高 木 信 宏	105-113
ベルト・モリゾと日本美術（3） ——モリゾ《娘とグレイハウンド犬》とマネ《休息》における浮世絵の画中画を中心に——	吉 田 典 子	115-143
ヴェルレーヌとデボルド＝ヴァルモール	倉 方 健 作	145-154
記憶のなかのアルベルチーヌ ——不在の人とそのイメージ——	松 原 陽 子	155-165
『囚われの女』の第3の「朝」 ——「パリの物売りの声」の生成——	中 野 知 律	167-188
ブルーストの庭園論 ——庭園の詩学と小説の美学のあいだで——	津 森 圭 一	189-207
ペギー『ジャンヌ・ダルク』における悪の問題	北 原 ル ミ	209-219
ベルナノス『田舎司祭の日記』を読むために	野 村 知佐子	221-229
振り返らないオルフェウス ——ドリュ・ラ・ロシエルの短編「声」をめぐって——	松 尾 剛	231-242
貧しさと太陽 ——カミュの初期作品をめぐって——	安 藤 智 子	243-249
フランスで黒人であること ——レオノーラ・ミアノ『消えた星のように』を中心に——	元 木 淳 子	251-271
ジッドにおける「ディスポニビリティ」の概念	森 井 良	273-287
ジッドとヴァレリーの詩をめぐる交流 ——初期の友情を中心に——	鳥 山 定 嗣	289-301
ジッドとヴァレリーの詩をめぐる交流（2） ——ヴァレリーの「紡ぐ女」におけるジッドの影響——	鳥 山 定 嗣	303-317
ジッド作品における日記を書く女たち ——『狭き門』のアリサと『女の学校』のエヴリーヌ——	小 坂 美 樹	319-331
ジッドとエドゥアール・デュジャルダン	吉 井 亮 雄	333-360
『ジッド＝フォール往復書簡集』補遺	吉 井 亮 雄	361-369

第 33 号（2014 年 12 月）	執 筆 者	頁 数
Trois de nos enfants (<i>monologue pour le théâtre</i>)	Xavier BAZOT	1-15
ポーランド語の与格非人称再帰構文とフランス語の受動的再帰構文 ——総称性とアスペクト——	井 口 容 子	17-27

戦後フランス語教育の変遷 ——1940-60年代のコレージュ教科書の事例から——	飯 田 伸 二	29-36
百間漫步 ——逢魔が時の文学——（その6）	森 茂太郎	37-60
「囚われの女」の室内画 ——ピアノラに向かうアルベルチヌ——	中 野 知 律	61-79
アルベルチヌのイメージ	松 原 陽 子	81-92
プルーストとエミール・マール（3） ——1903年4月のラン大聖堂訪問——	加 藤 靖 恵	93-103
Le salon de Mme de Villeparisis : l'affaire Dreyfus vue par Stendhal ?	Francine GOUJON	105-123
La correspondance de Marcel Proust, du journal quotidien à l'autobiographie : questions génériques et questions éditoriales	Pierre-Edmond ROBERT	125-142
Le prix Goncourt : une institution française. Le cas de Marcel Proust, lauréat en 1919 pour <i>À l'ombre des jeunes filles en fleurs</i>	Pierre-Edmond ROBERT	143-157
子宝祈願の遺産 ——ブルターニュ公継承問題をめぐって——	田 邊 めぐみ	159-174
エツェル版『パルムの僧院』の異文——テキストの修正をめぐって——	高 木 信 宏	175-194
ネルヴァル, 廃墟と宗教 ——『幻視者たち』『クイントゥス・オークレール』——	辻 川 慶 子	195-211
ベルト・モリゾと日本美術（2） ——《麦わら帽子の少女》における浮世絵の画中画について——	吉 田 典 子	213-236
無名の詩人, 半ば未知の詩人, 不遇の詩人 ——ヴェルレーヌ『呪われた詩人たち』のロジック——	倉 方 健 作	237-247
現実と表象の狭間で ——ドリュ・ラ・ロシエルにおける鏡像の問題——	松 尾 剛	249-262
〈存在〉についての一考察 ——ブランショとキルケゴール——	野 村 知佐子	263-270
千々岩靖子『カミュ——歴史の裁きに抗して』	安 藤 智 子	271-275
La nostalgie plotinienne et l'absurde camusien	Tomoko ANDO	277-301
Entre la catastrophe et la survivance : <i>Hiroshima mon amour</i> , 55 ans après	Midori OGAWA	303-314
ジッドのアンリ・マシス宛未刊書簡をめぐって	吉 井 亮 雄	315-328
シャンプイオン版『20世紀文芸雑誌事典』	吉 井 亮 雄	329-334

エメ・セゼール《生誕百年》	恒 川 邦 夫	1-38
アルベール・カミュ生誕百周年	千々岩 靖 子	39-49
L'absurde et la poétique du présent dans <i>L'Envers et l'Endroit</i> de Camus	Tomoko ANDO	51-68
中野知律『ブルーストと創造の時間』	加 藤 靖 恵	69-76
エリック・ブノワ『ベルナノス、文学と神学』	野 村 知佐子	77-81
百間漫歩 ——逢魔が時の文学——（その5）	森 茂太郎	83-110
ポーランド語の与格を伴う非人称再帰構文 ——フランス語の受動的再帰構文との対照において——	井 口 容 子	111-121
教科書のなかのお伽話 ——国語教科書編集理念解明のためのノート——	飯 田 伸 二	123-136
時禱書の語り ——マルグリット・ドルレアンの子宝祈願をめぐって——	田 邊 めぐみ	137-152
デュ・バルタスを窺めるクリストフル・ド・ガモン ——サラマンダー、不死鳥、ペリカン——	高 橋 薫	153-164
新聞を読むスタンダール ——『エゴチズムの回想』執筆とその背景——	栗 須 公 正	165-188
ブルーストとエミール・マール（2） ——シャルトルとラン大聖堂における聖母の魂を運ぶ天使の彫像——	加 藤 靖 恵	189-203
セリーヌ『なしくずしの死』英語訳の比較検討 ——ジョン・マークス訳とラルフ・マンハイム訳——	木 下 樹 親	205-212
デ・フォレ〈インファンス〉覚書	佐 藤 典 子	213-220
ジッドとナチュリスム ——サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエとの往復書簡——	吉 井 亮 雄	221-260
ジッドの盛澄華宛書簡	吉 井 亮 雄	261-292

第 31 号（2012 年 12 月）	執 筆 者	頁 数
中間構文における任意動作主と未完了アスペクト	井 口 容 子	1-9
刷新と伝統のはざままで ——1938 年男子コレージュ用フランス語指導書をめぐって——	飯 田 伸 二	11-30
百間漫歩 ——逢魔が時の文学——（その4）	森 茂太郎	31-57
Deux préfaces amicales de Marcel Proust	Pierre-Edmond ROBERT	59-66

Proust et les avions de Tolstoï : un « pastiche militaire » dans <i>Le Temps retrouvé</i>	Francine GOUJON	67-86
ブルーストと「ゴンクール日記」	和田 章 男	87-102
「ミス・サクリバン」の帽子 ——『失われた時を求めて』における文学の素描と絵画の素描——	加 藤 靖 恵	103-114
第1次世界大戦後のブルースト受容 ——『花咲く乙女たちの陰に』とゴンクール賞の余波——	禹 朋 子	115-139
「コンブレ」の生成をめぐる画期的著書 ——和田章男『ブルーストの小説創造』——	中 野 知 律	141-145
祈りの文脈 ——『カトリーヌ・ド・ローアンと フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』——	田 邊 めぐみ	147-161
『ローマの福音書』 ——アンリ4世治下の宗教論争の一断面——	高 橋 薫	163-208
墓の彼方からの手紙 ——エツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって——	高 木 信 宏	209-226
『ボヴァリー夫人』におけるフェリシテ像の成立	大 橋 絵 理	227-238
ゾラとボードレール ——ゾラの文学批評におけるボードレール評価について——	吉 田 典 子	239-264
ある戦争捕虜の肖像 ——ジャック・リヴィエールと第1次世界大戦——	小 黒 昌 文	265-278
没後50年と生誕100年に際して ——セリーヌとリュセット未亡人——	木 下 樹 親	279-285
「デラシネ論争」「ボプラ論争」の余白に ——ジッドとルイ・ルアールの往復書簡——	吉 井 亮 雄	287-298

第30号 (2011年12月)	執 筆 者	頁 数
Marcel Proust et « Les trois critiques », selon Albert Thibaudet	Pierre-Edmond ROBERT	1-12
La lecture de <i>La Douleur</i> de Richaud chez Camus	Tomoko ANDO	13-31
百間漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その3)	森 茂太郎	33-54
フランス語受動的再帰構文の意味構造	井 口 容 子	55-62
フランス語・文学教育の新局面 ——1925年カリキュラム指導書をめぐって——	飯 田 伸 二	63-85
写本装飾の位相 ——『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾——	田 邊 めぐみ	87-102

ヴィオレ＝ル＝デュックと文芸誌『リセ・フランセ』——書誌的側面から——	岩 根 久	103-115
1831 年, 1832 年のスタンダール ——流動する歴史の傍らで——	栗 須 公 正	117-148
ゾラはマネを理解しきれなかったのか ——マラルメとゾラの美術批評におけるマネ評価について——	吉 田 典 子	149-190
失われた時を求めて』 初期受容 ——『スワン家の方へ』をめぐって——	禹 朋 子	191-207
メムノンの眩き ——プルーストと〈声〉の詩学——	小 黒 昌 文	209-222
エルスチールとエミール・マール ——プルースト草稿カイエ 34 の再検証——	加 藤 靖 恵	223-244
ギュス・ボファが見た〈恐怖〉	木 下 樹 親	245-253
ウィーヌ氏, マイナスの司祭	野 村 知佐子	255-263
ドリュ・ラ・ロシエルと表象の危機 ——『シャルルロワの喜劇』再読——	松 尾 剛	265-280
歴史と忘却 ——反＝歴史的小説としての『最初の人間』——	千々岩 靖 子	281-299
ジッドとガストン・ソーヴボワ	吉 井 亮 雄	301-314
エチエンヌはジッドの「いとこ」なのか	吉 井 亮 雄	315-321

第 29 号 (2010 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとチボーデ	吉 井 亮 雄	1-40
ジッドと『タン・フューール』誌	吉 井 亮 雄	41-44
バルト＝カミュ論争再考 ——『ペスト』における歴史記述の問題をめぐって——	千々岩 靖 子	45-58
〈スタンダール＝クラブ〉余話 ——ポール・レオトーのアドルフ・ポー普宛未刊書簡——	高 木 信 宏	59-66
フランス語の受動的代名動詞と中間構文	井 口 容 子	67-77
百間漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その 2)	森 茂太郎	79-93
イヴ・シトン『読解・解釈・現在化』	飯 田 伸 二	95-101
ロベール＝ショヴァン編『セリーヌになる』	木 下 樹 親	103-106
アンドレ・アブー『行間のアルベール・カミュ』	安 藤 智 子	107-110

Du texte à l'image : Marcel Proust et <i>À la recherche du temps perdu</i> à l'écran	Pierre-Edmond ROBERT	111-119
La poésie et la genèse d' <i>À la recherche du temps perdu</i> : l'évolution de la critique proustienne de Leconte de Lisle	Yasue KATO	121-138
<i>Retour de l'U.R.S.S.</i> de Gide : revenir de l'utopisme à l'utopie du poème	Olivier KACHLER	139-150
Le 6 février 1934 et les écrivains (II) : André Chamson	Koichiro HAMANO	151-168
De l'oubli à la nostalgie : le tournant dans les écrits de jeunesse chez Camus	Tomoko ANDO	169-187
Une étoile filante (en marge de la <i>Correspondance Paulhan-Petitjean</i>)	Pascal MERCIER	189-193
Claude Lévi-Strauss et la littérature japonaise	Hervé-Pierre LAMBERT	195-209

第 28 号 (2009 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
André Gide en U.R.S.S.	Pierre-Edmond ROBERT	1-10
L'Équitation française et la Révolution	Igor SOKOLOGORSKY	11-18
La version française de l'imaginaire posthumain	Hervé-Pierre LAMBERT	19-38
百間漫歩 —— 逢魔が時の文学 ——	森 茂 太 郎	39-52
中立的代名動詞再考	井 口 容 子	53-66
文法の回帰 —— 2009 年施行コレッジ新カリキュラムをめぐって ——	飯 田 伸 二	67-78
アウルス欲望 —— フローベールの『ヘロディアス』 ——	大 橋 絵 理	79-90
ブルーストとマンテーニャ (2)	加 藤 靖 恵	91-107
母と娘 —— ベルナノスとバルバー・ドールヴィー ——	野 村 知佐子	109-118
ドリュ・ラ・ロシエルにおけるヴァリアントの問題 —— 『夢見るブルジョワジー』と「シャルルロワの喜劇」 ——	松 尾 剛	119-135
セリーヌのフラマリオン受容	木 下 樹 親	137-150

カミュ『裏と表』——ノスタルジーの昇華——	安 藤 智 子	151-161
アンドレ・ジッドとポール・フォール (2)	吉 井 亮 雄	163-178
ジッドのジャン・カバネル宛未刊書簡をめぐって	吉 井 亮 雄	179-184

第 27 号 (2008 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
アンドレ・ジッドとポール・フォール	吉 井 亮 雄	1-21
コントの成立 ——『三つの物語』と書簡——	大 橋 絵 理	23-36
モーパッサンの幻想と病勢	宮 川 佳 代	37-43
ブルーストとプリミティヴ派絵画 ——「スワン夫人をめぐって」の娼家とマンテーニャ——	加 藤 靖 恵	45-58
〈夢の子〉の変容 ——ベルナノス『新ムーシェット物語』——	野 村 知佐子	59-68
ハティビ『二重言語の愛』における語りの問題	井 上 祥 子	69-79
「バイリンガル作家」ナンシー・ヒューストン	横 川 晶 子	81-85
「メルモ = ポンジュ往復書簡」	飯 田 伸 二	87-89
教科書の詩学 ——フランスのコレージュにおける国語教育の現状——	飯 田 伸 二	91-112
知覚動詞・認知動詞の代名動詞	井 口 容 子	113-123
La nostalgie originelle dans l'œuvre de Camus	Tomoko ANDO	125-152
Nietzsche et la mélancolie d'Eschyle	Igor SOKOLOGORSKY	153-165
Le sujet du silence chez Mallarmé	Olivier KACHLER	167-176

第 26 号 (2007 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
La dynamique révolutionnaire du despotisme selon Montesquieu	Igor SOKOLOGORSKY	1-18
Voir avec les yeux du langage : <i>Intérieur</i> et <i>Les Sept princesses</i> de Maeterlinck	Olivier KACHLER	19-34
La nostalgie chez Albert Camus	Tomoko ANDO	35-47

受動的代名動詞における未完了性と自発性	井 口 容 子	49-58
『コレージュ版国語試験要綱』を読む ——フランスのコレージュにおける国語教育の現状——	飯 田 伸 二	59-74
ラシーヌのアカデミー演説（訳・註）	柳 光 子	75-90
第 12 回国際 18 世紀学会について	阿 尾 安 泰	91-101
創作と経済危機 ——『三つの物語』と書簡——	大 橋 絵 理	103-116
『剥製の手』と病	宮 川 佳 代	117-126
ユダの顔をもつ司祭 ——ベルナノス『闇』のセナーブル神父——	野 村 知佐子	127-150
『異邦人』の創作過程をめぐって	古 野 千 恵	151-164
ジッド『オイディプス』校訂版をめぐって	吉 井 亮 雄	165-176
Shinji IIDA, <i>Le Tournant poétique de Francis Ponge</i>	Igor SOKOLOGORSKY	177-178
木下樹親『セリーヌの道化的空間』	飯 田 伸 二	179-182
『カミュ＝シャルル往復書簡集』	古 野 千 恵	183-186

第 25 号（2006 年 12 月）	執 筆 者	頁 数
Aglavaine et Sélysette : une tour de silence au milieu des mots	Olivier KACHLER	1-17
フランス語の代名動詞とバルト語派言語の完了受動態構文 ——自発・可能・完了——	井 口 容 子	19-31
コレージュ第 6 学級フランス語カリキュラム ——翻訳と解説——	飯 田 伸 二	33-45
『赤と黒』の余白に ——『ヴァニナ・ヴァニニ』の成立——	高 木 信 宏	47-63
『聖ジュリアン伝』における 2 つの身体	大 橋 絵 理	65-86
セナーブルの死 ——ユダへの変容——	野 村 知佐子	87-97
カミュ『転落』における時間	安 藤 智 子	99-113
ジッドの『ギーターンジャリ』仏語訳 ——翻訳から出版までの経緯——	吉 井 亮 雄	115-127
中地義和『ランボー 自画像の詩学』	森 茂 太 郎	129-135

ルバテ＝クストー『敗者たちの対話』	松 尾 剛	137-142
-------------------	-------	---------

第 24 号 (2005 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
Histoire palimpseste : le nouveau fantastique	Masahiro IWAMATSU	1-36
所有の与格の諸相	井 口 容 子	37-51
『ジュリアン』のアイデア	高 木 信 宏	53-75
モーパッサンの幻想小説における「夢」	宮 川 佳 代	77-91
甘美な戦慄 —— ジェイコブス『猿の手』をめぐる ——	森 茂 太 郎	93-105
『田舎司祭の日記』における聖性の逆説	野 村 知佐子	107-121
道化物語としての『夜の果てへの旅』	木 下 樹 親	123-138
『異邦人』における「太陽」	古 野 千 恵	139-146
カミュ『ペスト』における語り的问题	安 藤 智 子	147-164
ジッド『放蕩息子の帰宅』校訂版補遺	吉 井 亮 雄	165-174
『デバ』誌特集号「フランス語をどう教えるか」	飯 田 伸 二	175-179
A・コンパニオン『反近代の作家たち』	松 尾 剛	181-186

第 23 号 (2004 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
受動的代名動詞のモダリティーと中相範疇機能拡張のメカニズム	井 口 容 子	1-17
『赤と黒』における〈聖堂〉 —— 第 1 部・第 18 章の制作をめぐる ——	高 木 信 宏	19-49
モーパッサンの幻想小説にみる〈超自然〉の表象	宮 川 佳 代	51-66
バタイユとベルナノスにおける聖なるもの	野 村 知佐子	67-82
矛盾の敷居,あるいは道化のはじまり —— 『夜の果てへの旅』研究序論 ——	木 下 樹 親	83-95
サン＝テグジュペリにおける〈砂漠〉	木 原 雄 一	97-114
『狭き門』校訂版作成のための覚え書き	吉 井 亮 雄	115-139
『アンドレ・ブルトン, フォンテーヌ街 42 番地』	川 口 大 輝	141-145

A・コルビック『カミュ——不条理, 反抗, 愛』	古 野 千 恵	147-150
『カミュと 20 世紀のエクリチュール』	安 藤 智 子	151-155
C・コランジェロ『ジャン・スタロバンスキー』	原 田 裕 里	157-161

第 22 号 (2003 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
Devenir d' <i>Hérodiade</i>	Olivier SÉCARDIN	1-33
事象叙述的性格の受動的代名動詞と状況補語	井 口 容 子	35-43
母性愛とヒロイズム ——『赤と黒』第 1 部・第 18 章の制作——	高 木 信 宏	45-64
語りのリズムとバランス ——アポリネール『腐ってゆく魔術師』——	川 口 藍	65-78
廃墟の道化師たち ——セリーヌの〈ドイツ 3 部作〉——	木 下 樹 親	79-99
魔術師との対話 ——ブルトン『ナジャ』をめぐって——	飯 田 伸 二	101-113
バタイユとキルケゴールにおける罪の概念	野 村 知佐子	115-129
L・ブリッセ『ポーランの「新フランス評論」』	飯 田 伸 二	131-133
F・ソマド『無秩序の人ドリユ・ラ・ロシェル』	松 尾 剛	135-138
『狭き門』初出テキストの校正刷	吉 井 亮 雄	139-148

第 21 号 (2002 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
Le roman prémonitoire	Jean-Luc AZRA	1-50
Le dialogue d'un solitaire : la pratique discursive de Francis Ponge	Shinji IIDA	51-69
助動詞として avoir を選択する非対格動詞	井 口 容 子	71-86
ルソーをめぐる読解のトポロジー	阿 尾 安 泰	87-97
『ラミエル』における社会諷刺	高 木 信 宏	99-126
財産論から遺伝論へ ——ヴァシェ・ド・ラプージュの〈家族小説〉——	松 尾 剛	127-156
ベルナノス『飲む』における聖なるもの	野 村 知佐子	157-166
リゴドン語り,あるいは老人の戯言 ——セリーヌの〈ドイツ 3 部作〉序論——	木 下 樹 親	167-176

G・レーマン『聖ジュリアン伝』	大 橋 絵 理	177-180
対談集『教師は弾劾する』	飯 田 伸 二	181-184
二宮正之『小林秀雄のこと ――自然と歴史のあいだ――』	森 茂 太 郎	185-191

第 20 号 (2001 年 9 月)	執 筆 者	頁 数
『赤と黒』の創作過程 ――着想と制作時期の再検証――	高 木 信 宏	1-31
「大いなるかな、エペソスのアルテミス」(1) ――メリメ『イールのヴィーナス』をめぐって――	森 茂 太 郎	33-40
フローベール『ヘロディアス』の地下空間	大 橋 絵 理	41-57
ウィーンの原型	野 村 知佐子	59-69
〈めまい〉の夢現劇 ――『またの日の夢物語 II』を読む――	木 下 樹 親	71-82
『西欧の誘惑』における「オリエント・東洋」	畑 亜 弥 子	83-90
ジャン＝ジャック・ルソー像の揺らぎを求めて ――在外研究資料外観――	阿 尾 安 泰	91-104
Face au soleil ou la stratégie du relief	Shinji IIDA	105-124
Les métaphores du sommeil	Jean-Luc AZRA	125-140
<i>L'Atelier des « Fleurs du Mal »</i>	Shigeki MIYOSHINO	141-151
D・デルブレユ『アポリネールとその物語作品』	川 口 藍	153-156
A・ピシヨ『純粋な社会』	松 尾 剛	157-160
C・カルパンティエ『初等教育修了証書の歴史』	飯 田 伸 二	161-168
「紙のドラゴン」と偽りの遊戯	吉 井 亮 雄	169-176

第 19 号 (2000 年 9 月)	執 筆 者	頁 数
スタンダール『パルムの僧院』――冒頭部の制作をめぐって――	高 木 信 宏	1-25
ボードレールにおける言語の虚脱 ――リヴィエールとベンヤミンによる読解をめぐって――	三吉野 滋 樹	27-46

Réalisme et vraisemblance dans les Contes de Maupassant	Jean-François HANS	47-53
ブルースト —— 夢の戦略 ——	今 川 泰 隆	55-66
『虐殺された詩人』における小説世界の二重化	川 口 藍	67-79
セナーブルの死	野 村 知佐子	81-91
松林から見上げる太陽 —— フランシス・ポンジュ『松林手帖』読解のために ——	飯 田 伸 二	93-112
夢見られる〈場所〉 —— 『薔薇の奇蹟』を読む ——	池 田 和 隆	113-125
1922 年のポンティニー旬日懇話会 —— ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡 ——	吉 井 亮 雄	127-140
アドリアン・バイエのラシーヌ評	柳 光 子	141-146
V・デル・リット編『スタンダール総合書誌』	高 木 信 宏	147-152
A・ビュイジーヌ『ヴェルレーヌ』	岡 由 美 子	153-156
セリーヌ『リュセット・テトゥーシュとミケルセン先生への獄中書簡』	木 下 樹 親	157-160
B・ブーニョ他編『ポンジュ書誌』	飯 田 伸 二	161-164
M・テムマン『アンドレ・マルローの日本』	畑 亜 弥 子	165-168
P-A・タギエフ『フランス人種主義理論』	松 尾 剛	169-172

第 18 号 (1999 年 6 月)	執 筆 者	頁 数
Le Geste chez Maupassant	Jean-François HANS	1-5
La question de la parole efficace chez Francis Ponge dans les années 1939-1944	Shinji IIDA	7-38
17 世紀のフランス芸術におけるアポロン像	柳 光 子	39-60
イメージ表象分析の試み —— ドンキホーテ, ルソー, タミヤン ——	阿 尾 安 泰	61-82
感受性と自己認識 (2) —— 『日記』から『アンリ・ブリュラーの生涯』まで ——	高 木 信 宏	83-106
倒錯の岸辺 —— ゴーチエ『死女の恋』をめぐる ——	森 茂 太 郎	107-130

『人工樂園』と時間	三吉野 滋 樹	131-144
フローベール『ヘロディアス』草稿研究 ——主人公像の造型について——	大 橋 絵 理	145-156
ホモ・ドゥプレクスの「統一性」 ——ヴェルレーヌ『平行して』をめぐって——	岡 由 美 子	157-169
ベルナノスのふたりの聖人 ——フヌイーユの司祭とアンブリクール司祭——	野 村 知佐子	171-181
苦境とけりをつけるために ——セリーヌのパンフレ（3）——	木 下 樹 親	183-194
『アルテルブルグの胡桃の木』における〈民衆〉	畑 亜 弥 子	195-206
『絶望的な地帯』を抜けて ——ジャン・ジュネの『綱渡り芸人』——	池 田 和 隆	207-217
プレイアッド新版『ラシーヌ全集』	柳 光 子	219-223
M・クラベズ『反動的左翼』	松 尾 剛	225-228
『ポンジュ＝トルテル往復書簡集』	飯 田 伸 二	229-232
「記号論」以後の物語理論	岩 松 正 洋	233-238
『地の糧』初版の表紙をめぐって	吉 井 亮 雄	245-250
ジッドのポール・フォール宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	245-250

第 17 号 (1998 年 6 月)	執 筆 者	頁 数
La baguette, la loupe et le râteau (Deux lettres inédites de Valry Larbaud à André Gide)	Pascal MERCIER	1-8
L'avènement d'un poète : Francis Ponge en 1942	Shinji IIDA	9-28
L'inspiration biblique dans les tragédies raciniennes (1674-1691)	Mitsuko YANAGI	29-48
フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞	井 口 容 子	49-64
18 世紀の権力空間論 ——『演劇に関するダランベール氏への手紙』をめぐって——	阿 尾 安 泰	65-88
駱駝, 悪魔, 女 ——カゾット『恋する悪魔』考——	森 茂 太 郎	89-112
『アルマンス』における主人公像の造型	高 木 信 宏	113-143
反復と〈新しいもの〉 ——ボードレールの「旅」における nous の多数化——	三吉野 滋 樹	145-164
ヴェルレーヌ・サチュルニアン ——処女詩集のタイトルをめぐって——	岡 由 美 子	165-177

ベルナノスのふたりの聖人 ——ドニサン神父とアンブリカールの司祭——	野 村 知佐子	179-190
臨床医と香具師の想像力 ——セリーヌのパンフレ（2）——	木 下 樹 親	191-201
ジャン・ジュネの『スプレディッツ』	池 田 和 隆	203-211
異世界の表象における固有名現実素	岩 松 正 洋	213-231
J-F・リオタール『マルローと署名せし者』	畑 亜 弥 子	233-236
M・コロー『マチエール＝エモーション』	飯 田 伸 二	237-240
M・ダンブル編『ドリユ、作家にして知識人』	松 尾 剛	241-246
楊 張 若名『ジッドの態度』をめぐって	吉 井 亮 雄	247-250

第 16 号 (1997 年 7 月)	執 筆 者	頁 数
『リュシアン・ルーヴェン』における〈衣裳〉	高 木 信 宏	1-15
ヴェルレーヌの同時代批判 ——聖ブノワ・ラブル崇拜をめぐって——	岡 由 美 子	17-30
死者と裏切り者 ——ドリユ・ラ・ロシエルの第一次世界大戦——	松 尾 剛	31-42
たわごとの文学論 ——セリーヌのパンフレ——	木 下 樹 親	43-57
初期ジュネにおけるコクトーの影響	池 田 和 隆	59-75
Francis Ponge face à l'art contemporain	Shinji IIDA	77-117
Racine devant la condamnation du théâtre	Mitsuko YANAGI	119-142
L・フレース『書簡に見るブルースト像』	今 川 泰 隆	143-145
J・ジェイルズ『ジャン・ジュネの映画』	池 田 和 隆	147-150
« Dialogues Orient-Occident sous le regard de Paul Valéry »	池 田 和 隆	151-155
『ジッド＝ブライ往復書簡集』	吉 井 亮 雄	157-162

第 15 号 (1996 年 7 月)	執 筆 者	頁 数
説明するポンジュ	飯 田 伸 二	1-31
ブルーストのネルヴァル論	今 川 泰 隆	33-47

『カルメン』はどのように作られているか —— 脱神話のための試論 ——	末 松 壽	49-69
ポストリアリスト・ファンタジーは幻想文学か —— 「とまどい」 から「逆転」 へ ——	岩 松 正 洋	71-96
『名前のない物語』の幻想性	野 村 知佐子	97-108
ジウリアの恋 —— スタンダール『社会的地位』の創作をめぐる ——	高 木 信 宏	109-123
ドリユ・ラ・ロシエルの反ユダヤ主義	松 尾 剛	125-142
ジッドとリュシアン・ジャン	吉 井 亮 雄	143-153

第 14 号 (1995 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
ドリユ・ラ・ロシエルの『ジル』 —— ファシズム思想をめぐる考察 ——	松 尾 剛	1-34
Au sujet des « Écritures » de Paul Claudel publiée en été 1938, dans <i>Verve</i>	OUYANG Juan	35-44
壁に閉ざされたシャンソン	木 下 樹 親	45-59
ヴィアンとジャズ	前 川 完	61-68
感受性と自己認識 —— スタンダール『エゴチスムの回想』管見 ——	高 木 信 宏	69-82
『モデラート・カンタービレ』にみる創作の転機	田 中 真 理	83-97
ジッド『パリュード』のプレオリジナル —— 「ル・クーリエ・ソシアル」と「ルーヴル・ソシアル」 ——	吉 井 亮 雄	99-116
ジッドと〈小説〉の探求 —— アラン・グーレ『「贋金つかい」を読む』 ——	吉 井 亮 雄	117-120

第 13 号 (1994 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
『カルメン』はどのように作られているか —— 脱神話のための試論 ——	末 松 壽	1-20
スタンダールの『チェンチー族』	高 木 信 宏	21-34
ヴェルレーヌとリュシアン・レチノワ —— 「リュシアン・レチノワ」連作詩編再読 ——	岡 由 美 子	35-45
ベルナノスとドールヴィイ —— 〈秘密〉の機能 ——	野 村 知佐子	47-58
『ラ・ホールの副領事』における〈逸脱〉	田 中 真 理	59-84
フランス語の過去分詞と反対格仮説	井 口 容 子	85-93

ジッドの結婚生活について今なにを語りうるか ——サラ・オーセイユ『マドレーヌ・ジッド』——	吉 井 亮 雄	95-108
--	---------	--------

第 12 号 (1993 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとトルストイ	吉 井 亮 雄	1-13
『ウィーン氏』における〈転回点〉の欠如	野 村 知佐子	15-31
ボリス・ヴィアンの『心臓抜き』——断崖の〈家〉が象徴するもの——	前 川 完	33-46
言語・システム・歴史 —— 18 世紀研究のための準備ノート ——	阿 尾 安 泰	47-66
『言葉なき恋歌』における葛藤	岡 由 美 子	67-77
偽りの旅路 —— Romantic Journey ——	森 茂 太 郎	79-94
ボードレールの〈小散文詩〉 —— 「髪の中の半球」と「旅への誘い」 ——	中 川 裕 二	95-123
エイモス『スタンダールにおける時間と物語』	高 木 信 宏	125-128

第 11 号 (1992 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
トゥルニエ『気象』 —— 逸脱する存在をめぐる ——	岩 松 正 洋	1-62
『よい歌』における〈純化〉	岡 由 美 子	63-92
『なしくずしの死』における〈進歩〉と懐古趣味	木 下 樹 親	93-104
『ラミエル』における虚栄の相貌	高 木 信 宏	105-124
『宿命論者ジャック』における小説的真理の探求	山 下 広 一	125-138
ジッド書誌の現状	吉 井 亮 雄	139-159

第 10 号 (1991 年 10 月)	執 筆 者	頁 数
『ギニョルズ・バンド II』の第 37 セカンス	木 下 樹 親	1-15
スタンダールの小説における〈まなざし〉	高 木 信 宏	17-36
『ボヴァリー夫人』の〈対〉の構造	田 中 真 理	37-49
『悪魔の陽の下に』における〈不安〉	野 村 知佐子	51-69

ボリス・ヴィアンの言葉遊び	前 川 完	71-95
『宿命論者ジャックとその主人』の3つの主題	山 下 広 一	97-129
《研究ノート：コンスタン》セクシュアリテの謎（日記に即して）	高 藤 冬 武	131-136

第9号（1991年3月）	執 筆 者	頁 数
La particule ga en japonais et le problème du « mapping » — Un essai dans le cadre de la Grammaire Lexicale Fonctionnelle —	Yoko IGUCHI	1-44
Autour des deux « Lady Macbeth » dans <i>La Loge (Gakuya)</i> de Shimizu Kunio	Jean-Christian BOUVIER	45-70
総称の le N をめぐると論争について	古 川 直 世	71-78
トゥルニエの神話的 ——『ガスパール、メルキオール、バルタザール』を読む——	岩 松 正 洋	79-112
セリーヌの『戦争』における〈グロテスク〉	木 下 樹 親	113-128
『アルマンス』における物語の構造化	高 木 信 宏	129-147
『贗金つかい』（ロンドン草稿）校訂版の批判的検討 ——作品冒頭部の執筆時期と方法——	吉 井 亮 雄	148-167

第8号（再創刊号，1990年8月）	執 筆 者	頁 数
Étude sur le traitement de la Bible dans les tragédies sacrées de Racine	Mitsuko YANAGI	1-33
L'idée des deux réalités chez Natalie Sarraute — la recherche de « la vie » —	Kyoko SAITO	34-38
L'idée du bonheur chez Rousseau	Yoshiro KURIHARA	39-46
与格の拡大用法と二重主題構文 ——統語構造と談話構造——	井 口 容 子	47-59
フランシス・ポンジュ試論 ——オブジェとの出会い——	飯 田 伸 二	60-76
『三つの物語』における色彩とことば	大 橋 絵 理	77-88
マラルメと音楽 ——初期作品における音楽の概念——	小 野 晶 子	89-98
アニーとクロディーヌ ——クロディーヌ・シリーズの2人のヒロイン——	小 野 晶 子	99-109

『放蕩息子の帰宅』における象徴と解釈の問題
——エリック・マルティへの反論——

吉 井 亮 雄

110-132